

国際開発学大学院高等教育ITカリキュラム のマネジメント目的とマージナリティ

逸見彰彦

株式会社マーケティング総合設計研究所

第一節 研究趣旨

報告者は平成十一年度にメディア教育開発センターの協力を得て、成蹊大学大学院経営学研究科にて調査を実施し、複数専攻間の共同事業である開発援助オムニバスケース研究講座に関する大学院教育の授業技術改善研究として、カリキュラムのIT機能置換の基礎研究を行った。

第二節 調査研究対象プログラムの位置

アイバースやマスタマンが述べる様に⁽¹⁾専攻取得後の期待される専門性および、研究議論環境により示される開発概念に差異が存在するため、大学院教育における「開発」概念の明確化の議論が不存在の現状がある。事例研究中心の総合大学院開発教育には、事実妥当性において大学院専攻教育にふさわしいか否かという問題点が常に存在する。プロッドヘッドは、⁽²⁾開発戦略の変遷に沿った開発教育思想の変遷を指摘している。我が国の総合大学院開発教育科目では開発戦略の未成熟、混沌性の反映で、開発戦略の広報的教育、批判的議論、および人類学的フィールドワーク論が混在したままである。大津や木村も示唆する様に⁽³⁾、大学院開発教育科目として事例研究のカリキュラム階層は、現時点では存在していない。金谷は⁽⁴⁾大学院開発援助教育に関する我が国の特殊性として多文化教育的基盤の欠如を挙げている。多文化教育的基盤の欠如は、特定領域の開発援助高等教育における劣後性の後背であり、不十分な体験的理解の温床となるとルーベン、ベネット、バンクスらも述べている⁽⁵⁾これらの開発援助教育要素に関してのカリキュラム上の分化置換議論も必要である。キム⁽⁶⁾は、教育プログラ

ム内の、異文化接触によるストレスが事例研究からの啓発性に重要であると論じている。また学習動機付けに関してバンデューラは⁽⁷⁾本来各学生が各専攻において所有するヒステリシス要素により規定される自己効力への確信が学生の参加及び啓発可能性に強い要因となる事を論じている。本件の対象カリキュラムは学生側の動機付けの範囲に関して特段制約を設けていない。カリキュラムおよび教授法に関する評価に関してブルーナーらは⁽⁸⁾知識の構造化、順次性、学習傾性、強度を重要な指標とすべきであって、高等教育におけるそれは、主に個人的差異の反映であることを示した。行動主義的な学習傾性に関する評価に関してクレイザーやケラー⁽⁹⁾は少人数の集合的広域大学院カリキュラムの教授目的の形成的評価の測定として、機能評価手法の文脈に基づく、処方モデル評価を示す。啓発性の投与が適切に参加大学院生に与えられているか個別の授業評価を行うべきである。メリルらは学習過程におけるカリキュラム階層の重要性を示しているが⁽¹⁰⁾、本カリキュラムは広域学域に関するものであり、認知的方略が多数設定されている。教授目標と教授活動の連関性に関して、ギャニエ、ブリックスらは⁽¹¹⁾教授活動の特定の目標性の必要性和フィードバックモデルによるシステムズアプローチの必要性に付いて論じている。本カリキュラムでは各自の目標設定は各学生の自己裁量に委ねられている。この様な広域カリキュラムでは、本来教授内容の離散化が、何らかの形で、側面から行なわれるのが望ましいが、現実には資源上の問題および、制限性によって実現していない。国際

Management Objects and Marginal Areas of IT Curriculums of International Development Advanced Studies for Gradurate Schools.

Akihiko Henmi

Marketing Grand Design Laboratory Inc.

7-16-12 Nishi Shinjuku, Shinjuku, Tokyo, YS Build. 3F. 160-0023, Japan.

開発援助研究における事例研究教育のIT機能置換には上記の留意すべき五議論。開発概念の中心概念評価。カリキュラム階層評価。自己効力評価。教育機能評価。教授内容の離散評価による啓発性の測定を前提とする必要がある。

第三節 授業評価計画の実際とその課題

広域型カリキュラムでは各コマ毎の評価手法の採用により教授者の個別適切性ルールの創発性を考えていく事が出来る。今回調査で顕著に見られた傾向は、事例研究重視のカリキュラムの再受講意欲であり、導入的啓発可能性である。学生の獲得する導入的啓発性は、各個人に新知的な理論受容フレームの端初性の発見、即ち自己効力評価に依るものと思われる。これに対し、カリキュラム評価は十分な教授内容の離散評価を前提としたものではなく、広域性、学際性の強い研究講座の持つ先端、萌芽的な啓発性を十分評価されているとは言えない。教授内容の離散評価向上のため国際開発学会の各部会等との連携等の学会組織との位置性の設計は今後の有益な議論である。講義メディアツール評価に関しては、全体構造を示す事前レジュメではなく、各講師の持ち込む各団体の出版物、資料、シンポジウム等が高いスコアを示した。教材能評価。開発中心概念評価。カリキュラム階層評価により詳細化した講義。ツール評価が必要である。

結節 本報告のまとめ

国際開発学の広域型ケース研究大学院教育の授業改善研究は、本調査研究は端初である。カリキュラムのIT化デザインに関して、学生の自己効力評価レベル設定の階層化を柱にしたカリキュラム。組織設計の議論が重要である。

[注釈](1)G. Ivers "Hope is a related woman." Lauback Literacy International. PBS. 1997. L. Masterman "Media Education :Eighteen Basic Principles" MEDIACY. 17. no. 3. Association for Media Literacy. 1995.

- (2)例えば「開発教育論議の十年一試論」金谷敏郎。開発教育vol122. pp. 14
- (3)木村和子「わが国における開発教育カリキュラムの現状と克服への一視点」日本カリキュラム学会報告1991. 大津和子「開発教育授業構成の理論と展開」国際理解No23. 1991.
- (4)「開発教育論議の十年一試論」金谷敏郎。開発教育vol122.
- (5)M. Bennet 1986 Towards ethnorelativism: A developmental model of intercultural sensitivity Cross cultural orientation. Ruden. B. D. 1976. Assessing communication competency Group & Organization Studies. Bunks. 1996. Crosscultural Societies. 邦訳。サイマル出版会
- (6)Y. Y. Kim. 1988. Theories in Intercultural Communication Stage.
- (7)伊藤秀子1994. 「自己の能力を信じる〜バンデュラの自己効力論」自己意識心理学への招待 有斐閣。
- (8)Bruner. J. 1966 Toward a Theory of Instruction. 邦訳 黎明書房
- (9)Keller. J. M. Motivational Design of Instruction In. C. M. Reigeluth(ed) Instructional Design Theories and Models:1983.
- (10)例えば「教授デザイン研究の発展と主な教授デザイン理論」。佐賀啓男。放送教育開発研究センター研究報告No94. pp. 7
- (11)Ibid. pp. 5
調査項目結果

	有効数	平均	度数			
			4	3	2	1
質問により自らの研究テーマへの啓発が出来た	17	2.824	6	4	5	2
他者の質問により自らの研究テーマへの啓発が出来た	17	2.765	4	7	4	2
講師の講義により自らの研究テーマへの啓発が出来た	17	3.235	8	7	0	2
議論をしたくても、他の参加者のタイムで時間切れだった	17	2.000	0	6	5	6
合宿での議論は自らの研究テーマへの啓発が出来、大賛成だった	17	3.000	0	0	0	17
コアディネーター、客員教授の質問により自らの研究テーマへの啓発が出来た	17	3.059	5	9	2	1
議論をするのには遠慮があった	17	2.059	0	6	6	5
講師の中にも、口だけで、議論・討論の場を開いてほしかった	16	2.553	1	8	6	1
emailによる、事前の講師へのアポイントメント・質問が啓発に役立った	16	1.625	0	2	6	8
emailによる、事後の講師へのアポイントメント・質問が啓発に役立った	16	1.963	0	1	7	8
講師の紹介による、リソースバウンズ・研究資料への接触が啓発に役立った	17	3.059	5	9	2	1
講義手法のうち、ビデオプレゼンテーションが自らの研究テーマへの啓発に役立った	17	2.706	3	7	6	1
講義手法のうち、和文レクチャーペーパーが自らの研究テーマへの啓発に役立った	17	3.176	7	7	2	1
講義手法のうち、英文レクチャーペーパーが自らの研究テーマへの啓発に役立った	17	2.941	5	6	2	2
講義手法のうち、スライドプレゼンテーションが自らの研究テーマへの啓発に役立った	17	2.824	4	8	3	2
講義手法のうち、講師レクチャーが自らの研究テーマへの啓発に役立った	17	3.235	7	7	3	0
講義手法のうち、講師プロフィール・配布資料が自らの研究テーマへの啓発に役立った	17	3.471	9	7	1	0
自らの研究分野と異なる他領域の質問が研究テーマへの啓発に役立った	17	3.353	10	4	2	1
自らの研究分野と異なる他領域の事例研究が研究テーマへの啓発に役立った	17	3.412	10	5	1	1
自らの研究分野と異なる他領域の講義が研究テーマへの啓発に役立った	17	3.471	10	6	0	1
自らの研究分野の質問が研究テーマへの啓発に役立った	15	2.333	1	6	5	3
自らの研究分野の事例研究が研究テーマへの啓発に役立った	17	2.529	2	8	4	3
自らの研究分野の講義が研究テーマへの啓発に役立った	17	2.882	4	9	2	2
講義受講の結果、インプリーションの理解が深まった	17	3.000	5	8	3	1
講義受講の結果、インプリーション研究の糸口が発見出来た	14	2.765	3	8	5	1
講義受講の結果、理論研究の糸口が発見出来た	14	2.714	2	6	6	0
講義受講の結果、理論研究の糸口が発見出来た	14	2.857	3	6	5	0
学友研究論文の作成に直接役立てるため受講した	14	2.143	2	3	4	5
学友研究分野の研究に直接役立てるため受講した	14	2.429	3	4	3	4
国際開発学研究の基本を得るため受講した	14	3.071	6	5	1	2
国際開発学研究の人間を育てるため受講した	13	2.769	3	5	4	1
国際開発学研究の何がしかのヒントを得るため受講した	14	3.357	7	6	0	1
異領域分野の研究に接するため受講した	14	3.071	6	5	1	2
他大学・機関の指導員を得るため受講した	14	2.571	4	4	2	4
度数以上の教授と議論したため受講した	12	2.250	1	4	4	3
今回の受講は2回目以上である	14	2.929	9	0	0	5
オムニバス講義の受講は2回目以上である	12	3.000	8	0	0	4
オムニバス講義は今後も進んで受けた	13	3.692	10	2	1	0
受講学生のレベルは自らの研究レベルに役立った	13	3.000	4	6	2	1
講義のレベルは自らの研究レベルに役立った	13	3.385	5	8	0	0
オムニバス講義の領域に行いて、さらに深く研究を続けていきたい	12	2.500	5	6	0	1
講義には積極的に参加した	13	3.231	6	4	3	0
自分の知識や常識を質問インパクトがあった	13	2.615	3	4	4	2
より重要な概念とそうでないものの区別ができた	13	2.462	1	5	6	1
OHID、VTR、プリントなどの授業の準備ができていた	13	3.308	6	6	0	1
質問が困ったことがあったとき、この先生なら気軽に相談できた	12	2.697	2	5	4	1
この授業のような教養力を育てる授業をとってみたい	13	3.073	4	7	1	1
この授業の目的はいつも明確であった	13	3.462	7	5	1	0
講義は全体的にみて自分にとって価値があった	13	3.538	7	6	0	0
授業内容は、精選化され体系立てられていた	13	3.154	4	7	2	0